■「学習活動」を記述する際の留意点

●外から見える子どもの姿で書く。
・主語は「子ども」。たとえば、・読む・書く・聞く・発表する・話し合う・作る・演奏する　等

●問題解決的な過程を意識して構成する。①課題把握、②課題追究、③課題達成（自己評価活動）　子どもの意識の自然な流れを大切にする。

●個人、グループ、全体のうち、どの活動なのか分かるように記述する。

●「思考活動（理解・判断等の内面の姿）」を動詞にして書くことは避ける。
・たとえば、・考える・知る・理解する・決める・意欲をもつ・見通しをもつ　等。
・このような表現をすると、子どもの活動とその活動によって育まれる内容とを分けて捉えることに無自覚になってしまう。大切なのは、その「思考活動」はどのような子どもの「実際の外から見える活動」によって達成されるのか？ということである。

■「学習内容」を記述する際の留意点

●名詞、体言で記述する。　●学習活動には、それに対応して必ず学習内容がある。

●指導案の中で最も大切な事項は、学習内容である。これが記述されなかったり、曖昧だったりすると、学習活動や支援が決まらない。指導の善し悪しも判断できない。

●学習内容は、その学習活動や「学習活動における具体の評価規準」に合わせて
①関心、意欲、態度　②技能　③見方・考え方　④知識、理解　の４側面（その教科の評価の観点）の一つ、あるいは複数を記述する。①や③が書かれないことが少なくない。「学習活動における評価規準」に対応した「学習内容」は不可欠。

●導入では、①が必要。終末までには、本時のねらいを満足する学習内容が記述される。

●学習内容設定のポイントは二つ
①「育みたい子どもの姿」をイメージして、内容として書き上げる。
②板書に書く内容を具体的にイメージして、内容として書き上げる。

■「支援（○）と評価（◆）」を記述する際の留意点

●支援（○）記述の留意点
① 全ての子どもに学習内容を確かに獲得させるために教師が工夫する「活動や手だての実際」を具体的に記述する。したがって、活動（あるいは内容獲得）が十分な子どもと不十分な子ども別に記述されることが多い。支援の対象を明確にする。
・「○○が早くできた子どもには、理解を一層確かにするために、～をさせる。」
・「□□に意欲的に取り組めない子どもには、～を参照させることにより・・・」
②「目的」と「具体的な手だて」を記述する。たとえば、
・「～することを通して、△△する。」（前に具体的な手だて、後ろに目的）
・「△△できるようにするために、～する。」（前に目的、後ろに具体的な手だて）
③具体的でない支援や、願いを書かない。
・×「○○を押さえる」（何をどのようにしたら押さえたことになるかを記述。）
・×「意欲的に取り組ませたい」（単なる願いや期待なら無理をして記述しない。）
④当たり前のことや、学習活動に書いていることを繰り返して書かない。
・×「課題を黒板に書く」（一般的に、課題が不明確な活動はない）

●評価（◆）の記述の留意点
① そもそもどんな支援も、何らかの評価（子どもの見取り）を根拠に行われる。
②とりたてて「評価（◆）」という項目を立てて記述する場合は、本時のねらい、学習活動・内容に照らして設定された「評価規準」をものさしに、全ての子どもを対象に教師が行う評価や、支援の活動を記述する。二つの段階がある。
・評価をするために教師がする手だてを記述する。**（何をどのように見取るか？）**
→「○○を考えることができたかどうかを、プリントの○○を見て評価する。」
・評価した結果を次の支援にどのように生かすか記述する。**（そしてどうするか？）**
→「○○が不十分な子どもに対しては、教科書○ページの長方形を使った例題を再度行わせることによって、○○に着目できるようにする。」
② 取り立てて行う評価（◆）は「指導と評価計画」に記述したこと（「学習活動における具体の評価規準」）と対応する。１単位時間で、１，２カ所が一般的で現実的。
④子どもの自己評価を教師の評価に生かす工夫も必要。（特に情意面の評価）